

喜寿記念 安齋育郎 絵手紙展 訪問記

桂川秀嗣

2017年4月16日、安齋育郎先生の喜寿の誕生日。喜寿記念絵手紙展を京都の画廊で開催するとの案内をいただきました。一昨年の祇園祭以来2年ぶりの京都行きです。行きの新幹線は東京発12:50発、京都15:08着。京都駅から地下鉄で今出川駅まで行き、タクシーで会場のJARFO京都画廊まで1メートルでした。画廊に入ると、順路に従い平和関係、原発関係、その他に分類された絵手紙が、左奥に原発と「福島プロジェクト」のパネルが展示されていました。部屋の中央に、寛げるようにソファとテーブルが配置され、テーブルの上には壁に貼りだされていない沢山の絵手紙が綴りとなって数冊、置いてありました。これらは自由にめくって閲覧できます。これだけ見ても大変な数の絵手紙だとわかります。会場設営も大変だったでしょう。入口を入ってすぐ右うしろ、通りを面したところに、安齋肇さんの作品、グッズが置いてありました。下の写真は4時20分ごろの会場風景。



会場入り口から 奥に原発パネル 平和関係の絵手紙と著書 安齋肇コーナー

5時20分頃、喜寿記念パーティーが始まりました。オープニングのスピーチがあって、次に私が指名されました。喜寿のお誕生日、絵手紙展の開催おめでとうございますと挨拶を述べたあと、京都という土地柄もあって、日頃はすることもない話から始めました。「よく聞かれる質問に“桂川”の姓は京都の川の“桂川”と何か関連があるのですか?というのがあるのですが、決まって、『いいえ、別にありません』と答えます。が、本当はあるのです。」と初めて明かしました。が、ここで私が求められているスピーチはそんなところにはない筈なので次の話に移りました。「この会場は安齋育郎・喜寿記念・絵手紙展と銘打ってはいませんが、さながら、“安齋育郎ミュージアム”のようです」と述べたら、あちこちで頷く顔が目に入りました。つづいて、「これで、ピース・カフェが付いていれば営業可能ではないかと思われそうです」と言ったら、同感だという空気のざわめきが起こりました。伝統文化の息づくところには美味しいコーヒーがある、とは私の持論ですが、京都はまさに適した地と言えるでしょう。安齋先生は、これまで絵手紙をおそらく千通以上は書いて下さうとおっしゃってますが、この会場にあるのはその一部でしょう。会場には、ご両親の肖像画が懸かっていて、学生時代のノート、たくさんの著作が並んでいてミュージアムの要件が揃っています。うなずけます。千通以上の絵手紙を発信されているというのは知り合いもそれ以上いるということなので、その一人である私は、どういう知り合いかという話を

しなければなりません。私は、展示場でいうと、左奥の黒い格子のパネルに紹介されている「福島プロジェクト」の関係です。安齋育郎の仲間として紹介できる物的証拠は、右壁面の下のテーブルに並んでいる安齋先生の数ある著書中に、小さいけどひととき目立つ赤い表紙の本：J. ロートブラット著『戦争と放射線』です。当時これを我々の勉強会のグループで翻訳し、1982年に東大出版から出版しました。35年前のことです。現在読み返しても、その理性的な見識の高さには感服させられます。これを紹介したのは、トランプ政権発足以降、急激に米国と北朝鮮の動きが容易ならざる緊張状態に直面していますが、すでに35年前書かれた本書で、核戦争が起こったらどうなるかということ、例えば、“核戦争における放射線による死傷者数”などについて、理性的な見識が示されていることをお話ししたかったからです。が、その内容には触れずに、2011年の東日本大震災・原発事故後に再び、私たちが「福島プロジェクト」というグループで活動することになったいきさつを紹介しました。私は2011年11月から翌年5月まで、NHKのE TV特集の依頼を受けて、阿武隈川水系と福島県、新潟県の阿賀野川水系の放射能汚染の測定を行っていました。その後、二本松市の放射線専門家アドバイザーを務めていましたが、二本松市で安齋先生が二本松市の出身だと聞きました。本当は、二本松は疎開先だったのですが、これは奇遇だと思い連絡を取りあって、「福島プロジェクト」活動がスタートしました。また、2015年に、南相馬の仮設住宅であった学習会で、参加者から（安齋先生は）この活動をどの位続けられますかという質問があったとき、先生のとっさの答えが“後10年は続けましょう”でした。私は安齋先生より1歳年下なので、先生より先に辞めるわけにいかなくなりました（笑いが起こる）。「福島プロジェクト」の活動を始めて、まもなく5年になります。今日は喜寿のお祝いでしたが、次の節目は傘寿でしょうか。この後、安齋ゼミの卒業生、ファンクラブのみなさんのスピーチが続きました。6時15分ごろ。誕生日恒例のお誕生日ケーキが運ばれて、ご本人がケーキカットをしました。私もいただきました。幾人かの方とおしゃべりをしているうちに時間が経って、7時近くになって慌てて辞去しました。慌てたので肇さんのグッズを買い忘れました。グッズの売り上げは「福島プロジェクト」に寄付しますと書いてありました。ありがたいことです。



京都に来たときはいつも「阿闍梨餅」を買って帰るので、買おうとしたら、どの店も“今日の阿闍梨餅は完売です”の札が出ていました。仕方がないのでくず餅と乾菓子を購入。7時58分に新幹線に乗って、東京駅に着いたのは10時40分でした。千葉の八千代台の自宅玄関に着いたとき丁度12時でした。



大河となる。今後、桂川の姓を用いよ」と命じて学統をつがせ、小助は名を甫筑と改めたとされています。江戸では将軍家の侍医として幕末まで続きました。「桂川」姓と京都の川の「桂川」の関わりは以上です。

文人画家 蕪村を思いだしたところで、桂川を詠んだ蕪村の句があります。

水一筋月よりうつす桂河

桂川については、『蘭学の家 桂川家の人々 全三巻』今泉源吉著(1965) 篠崎書店という、大著が残っています。

『名ごりの夢 一蘭医桂川家に生まれて一』今泉（桂川）みね 平凡社 東洋文庫
今泉みねは、桂川甫周（7代）の娘、今泉源吉の母。江戸の桂川総本家を訪れた多士済々が登場します。

これを、下敷きにした『将軍家御典医の娘が語る江戸の面影』 安藤優一郎著平凡社もあります。

これらを読むと、当時、江戸に出てきたばかりの新参、福沢諭吉がどうして咸臨丸に乗って渡米できたのか？ それは小学6年生のとき国語の教科書に出ていた「咸臨丸」の謎でした。中学生の時、日本史の授業で「勝海舟は分かるけど、福沢諭吉が咸臨丸に乗れたのはどうして？」という私の質問に先生から納得のいく答えが得られなかったという思いがずっとあったのですが、「名ごりの夢」はその謎を解いてくれた懐かしい本です。

2017.4.28